福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

福井の外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトの展開：コーディネーターとしての5年間をふり返る

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 半原, 芳子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10872

福井の外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトの展開

コーディネーターとしての5年間をふり返る

半原　芳子

Ⅰ. はじめに

筆者は2013年10月に、福井大学大学院教育学研究科［福井大学教職大学院］(2018年4月より福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科［福井大学連合教職大学院］）に着任した。着任してまもなく、福井県の公立学校の外国にルーツを持つ児童生徒の学習支援にかかわる機会をいただき、それが2019年5月現在まで続いている。はじまりは、福井大学の大学院生3名と開始した中国出身Mちゃんへの支援であった。当時小学1年生だったMちゃんも、2019年5月現在、中学1年生となった。

筆者がコーディネーターを務める「外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクト」には、福井大学の学生および他大学の学生、社会人等多様な年齢や背景、国籍を持つメンバーが参加してくれている。2018年度は、上述のMちゃんへの支援をはじめ7つの公立小・中学校で支援を行うことができた。

半原（2018）にも記したが、本実践をふり返ると、当初は想像もしていなかった展開を迎えていることに気づく。それは単に学習を支援する子どもの人数や学校数が増えているということではない。自分のなかで本実践についての意義や価値が育ち、それに伴い自分の役割が変化・拡大しているのを実感している。また、このコミュニティをどう持続的に発展させていけるのかを考えるようになり、目の前の出来事に慌てず見通しを持ちながら、次の展開に向けた機会をうかがう力が自分のなかで育ちつつあるのを感じている。

本稿は、昨年度の記録（半原2018）を支えに、この5年間の本プロジェクトの展開を大きく掴み直すものである。そこから、第二サイクルとしての次の5年間に向けた展望を拓きたい。

Ⅱ. 実践の展開

1．外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトが立ち上がる（2014年度）

1）中国出身Mちゃんへの「教科・母語・日本語相互育成学習」

前述のように、本プロジェクトの出発点となったのは、福井大学の大学院生3名と始めた中国出身Mちゃんへの学習支援である。2013年3月、私は福井大学大学院教育学研究科学校教育専攻が必修科目としている「協働実践研究Ⅰ・Ⅱ」を履修する3名の大学院生（日本人学生1名と中国人留学生2名）と出会った。当該授業は、自分たちの関心のあるテーマに基づき一年間協働探究に取り組むもので、3名は外国人子女をテーマにすることを考えていた。私はこの科目の担当教員ではないものの、これまで首都圏で外国にルーツを持つ子どもたちへの学習に携わってきたことから、彼女たちの協働実践研究に同行することとなった。

3名は中国出身Mちゃんへの「教科・母語・日本語相互育成学習」を開始した。Mちゃんは当時小学1年生（翌月小学2年生）で、来日1年となる子どもであった。年齢が幼い時期に来日した子どもは、日本語環境のなかで母語を使わないでいると母語の力が極めて弱くなる。そ

のことは母語と日本語の二言語不十分（ダブル・リミテッド）という状態や、親子の間でコミュニケーションがとれなくなるといった深刻な状況を引き起こす。M ちゃんの両親は中国出身で家庭では中国語が使われていたが、7 歳という年齢を鑑みると、母語を意図的に学習し保持することが非常に重要であると思われた。したがって、M ちゃんへの支援では、M ちゃんが学校で取り組んでいる教科（国語）の学習を、母語（中国語）と日本語で行うことにした。

支援は週に 1 回約 90 分、大学構内にある福井大学附属実践研究センター（現、福井大学教育実践総合センター）の一室を借りて行われた。90 分のうち前半は中国人留学生が M ちゃんと中国語で学習を進め、後半は日本人学生が日本語で学習を進めた。支援で用いる教材の翻訳やワークシートの作成は 3 名が協力して行った。

彼女たちの実践で特筆すべきことの一つに、福井大学「探求ネットワーク」との連携がある。M ちゃんへの支援開始直後、3 名は M ちゃんが放課後一人で自宅にいることを知る。中国人留学生が M ちゃんの両親に事情を尋ねたところ、M ちゃんが日本人の友達の家に遊びに行って迷惑をかけても自分たちが日本語で謝りに行けないため外出を控えるよう M ちゃんに命じているとのことだった。そこで 3 名は、福井大学の学生が取り組んでいる「探求ネットワーク」を M ちゃんの両親に紹介した。探求ネットワークは、月に 2 回土曜日に、福井大学の学生が地域の子どもたちと探究的な活動を行っているものである。探求ネットワークであれば両親のそうした心配は無用で、M ちゃんは同い年や異年齢の子どもたちと一緒にのびのびと活動ができる。両親は彼女たちの提案を快諾し、M ちゃんは探求ネットワークに入ることとなった。

M ちゃんは、3 名の大学院生と探求ネットワークの学生たちのおかげで、母語と日本語の力を十分に伸ばし、たくさんの人とつながりながら心と体を大きく成長させた。この年 3 名は後輩に M ちゃんの支援のバトンを渡し、卒業した。

２）福井市 K 中学校での放課後支援の開始

M ちゃんへの支援が始まり、ほどなくしてから福井市 K 中学校（以下、K 中学校）で外国にルーツを持つ生徒への学習支援を始めることとなった。K 中学校は福井市のなかで外国籍住民が最も多い地域にある学校である。K 中学校で最初に出会った生徒は、中学 3 年生の N 君であった。N 君は小学生の時に韓国から日本に来た男子生徒で、滞日歴が長く、日本語も堪能であった。家では韓国出身の母親と韓国語で会話をしているとのことだった。先生方によると、N 君は国語と社会の点数が伸び悩んでおり、このままだと志望校への合格は難しいとのことだった。N 君への支援は週に 1 回放課後の約 60 分、福井大学の韓国人留学生と私が K 中学校を訪れ行うこととなった。伸び悩んでいる国語と社会は、母語（韓国語）と日本語で学習することにより理解が進み自信をつけていくと思われた。実際、N 君は二言語で学習することにより、苦手な社会と国語の力を大きく伸ばしていった。

秋になると、N 君への支援を行っている放課後の教室に、中学 3 年生でフィリピン出身の K 君と T 君、そして K 君の妹で中学 2 年生の C ちゃんが加わった。3 名の生徒の参加により、教室は一気に賑やかになった。支援者として、教育地域科学部 2 年生の片川絵里奈さんとフィリピン人研究生のマグラブナン・ポーリンさんが加わってくれた。K 君と T 君は高校受験のための勉強をポーリンさんとフィリピン語で進め、C ちゃんは本人の希望で片川さんと日本語でおしゃべりをすることから始めた。

3 月になり、N 君、K 君、T 君は無事志望校に合格した。3 人の卒業により放課後の教室は中学 2 年生の C ちゃんのみとなったが、そこに中学 1 年生でフィリピン出身の KO 君が加わった。

３）1 年目をふり返って

本プロジェクトが始まり今年で丸 5 年の月日が経つが、この間私は子どもに直接支援を行う側から、学生の協働探究を支える側へと自身の役割を変えていくことになる。当時その役割の転換は、大きな葛藤を伴うものであった。なぜなら私なりの「最善のアプローチ」があり、そのアプローチで直接私が子どもたちに学習支援を行いたかったからである。また、学生を支える側にまわった場合、その役割がどのようなものか分からない不安も強かった。しかし今思えば、その転換がなければ、現在のように複数の学校で本プロジェクトを行う展開はなかったと思う。

役割転換のきっかけとなったのは、本プロジェクトの出発点となった中国出身 M ちゃんへの学習支援である。そこで私は、自分が直接 M ちゃんに支援を行うのではなく、3 名の院生の協働探究を支えることを、ある意味余儀なくされた。今思えばそれは当然のことであるが、本プロジェクトの 1 年目をふり返った 2015 年の実践記録（半原・柴岡 2015）に、私はその葛藤を次のように記している。

実は私は中国出身の M ちゃんへの学習支援が始まった

際、「協働実践研究プロジェクト」の学生たち3人と一緒に自分もMちゃんに直接的な支援をしたいと思っていた。しかし、それは物理的にやや難しかったこと、またMちゃんが学生との学習をとても楽しんでいたことから、自分がMちゃんに直接的な支援をすることは諦めた。その代わり私は学生たちと「Mちゃんの支援のあり方を共に考える」協働探究者でありたいと願いそのような行動を心がけてきた。しかし、それは思っていた以上に難しいものだった。例えば、学生たちはMちゃんが言語で「何」を話しているかよりも、Mちゃんの「発音の癖」に注目することが多かった。支援中、学生が何度か（私から見ると何度も）Mちゃんの発音を修正する場面があった。［中略］発音修正をめぐり私と学生の間にはかなりの意見の相違があり、彼女たちの実践を見守るのは私にとって辛抱が必要だった。

［中略］

Mちゃんへの支援が始まって約1年が経過した頃、学生と私とで今までの支援をじっくりふり返る機会を持った。その際、学生がMちゃんへの支援を通じ非常に多くの学びを得ていたことを知った。［中略］学生らのふり返りを聞きながら、私が思う以上にずっと彼女たちは教育を広く捉え実践していたことを知った。そして、発音指導ばかりを気にして、彼女たちの実践を小さく見ていた自分の視野の狭さを反省した。

学習支援者から「学習支援者を支える側」へとまわることの葛藤とそのなかでの気づきのなかで、コーディネーターとしての自覚が少しずつ芽生え、育っていった。子どもの成長を見るのはもちろん嬉しいが、本プロジェクトのメンバーである学生たちが協働しながら子どもの学習を支え、そのなかで成長するところに立ち会えるのは、今の私にとって非常に大きな喜びである。コーディネーターとして実践の舵取りを始めた2年目、思わぬ失敗を重ねることとなる。

2．プロジェクトの拡大を試みるが、躓く（2015年度）

1）学生の実践のなかでの試行錯誤と挑戦に気づく（中国出身Mちゃんへの支援）

2015年度となり、Mちゃんは小学3年生になった。Mちゃんの支援は、「協働実践研究Ⅰ・Ⅱ」を履修する学生によるものではなくなったが、同授業科目担当の先生方および附属教育実践センターの理解と協力のおかげで、前年度と同じ形で継続できることとなった。この年度は、主に教育地域科学部4年生の錦織珠美さんと中国出身で教育学研究科学校教育専攻1年生の王研さんが担当してくれた。前年度支援を行ってくれた中国人留学生は、直接の支援ができなくなった後も、Mちゃんの支援で使う翻訳教材の作成など後方支援を担ってくれた。

支援は特に大きな問題もなく進んだ。Mちゃんは雨の日も雪の日も休むことなく通った。この年度で一番印象に残っているのは、錦織さんの教員採用試験時のエピソードである。中学校の国語の教員を目指していた錦織さんは、福井県の教員採用試験を受けた。2次の面接試験で錦織さんはMちゃんの学習支援について話し、今後福井県で外国にルーツを持つ子どもたちが増えるだろうこと、そして、その子たちが必ずしも英語を話すとは限らないこと、したがって今後は隣の席の友達の言語、例えば中国人のクラスメイトがいたら中国語を、フィリピン人のクラスメイトがいたらフィリピン語を子どもたちが学ぶことが教育の国際化につながるのではないかという趣旨の意見を述べたそうだ。面接官も錦織さんが行っているMちゃんの支援に興味を持ち、いろいろ質問してくださったそうだ。

この年度の支援が終了した後、私は錦織さんが一年間の支援のなかでどのようなことを経験したのかを聴く機会を得た。錦織さんはふり返りのなかで、Mちゃんの支援において様々な悩みや壁にぶつかってきたこと、その都度自分で考えたり王さんに相談したりしながら工夫し、少しずつ実践を発展させてきたことを語ってくれた。話を聴きながら、錦織さんが実践のなかでたくさんの判断をし、挑戦をし、失敗をし、そして再挑戦してきたことを知った。大局としては「大きな問題はない」そのなかに、実は状況の起伏があり、そこでの錦織さんの不断の調整があったのである。錦織さんの話から、本プロジェクトにかかわってくれている学生一人一人に錦織さんのような固有の挑戦やそこからの実践の展開があることに思い至った。

錦織さんは、2016年2月の「実践研究福井ラウンドテーブル」でMちゃんへの学習支援の経験（プロセス）を報告してくれた。そこで、かつて初任者研修を担当していた福井県教育委員会の方や県外の定時制高校の先生と同じテーブルになり、みんなが錦織さんの実践を興味深く聴いてくださったそうだ。

錦織さんは現在福井県で教員をしている。先生になった錦織さんと、いつかまた外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援ができたら嬉しく思う。たとえ再会できなくても、本プロジェクトにかかわってくれたメンバーが、

福井県で教員として活躍している事実が、自分の大きな励みとなっている。

2）2つの異なる支援形態が同時進行し調整に躓く（福井市K中学校）

2015年度、K中学校での支援は前年度からの放課後支援に加え、新たに通常の時間割のなかに入っての支援が始まった。まず、放課後支援であるが、中学3年生になったフィリピン出身のCちゃん、中学2年生になったフィリピン出身のKO君が前年度から継続して参加した。そこに中学1年生で日系ブラジル人のAちゃんとHちゃん、そして秋には、来日したばかりの中学3年生でフィリピン出身のAJちゃんが加わった。支援者は前年度に続き教育地域科学部3年生になった片川さんと教職大学院生となったポーリンさん、そして新たに工学研究科のYさんと教員研修留学生数名が参加してくれた。支援の形態は学生と相談の上、子どもたちが勉強したいものを自由に持ってくることを基本とした。子どもたちは国語、数学、理科、社会、英語等実に様々なものを持ってやって来た。学生たちはどんな教科が持ち込まれても、子どもたちと「共に学ぶ」姿勢でかかわってくれた。メンバーの専門が多岐に渡っていたこともよかった。例えば、子どもと一緒に解いている数学の問題が分からなくても、数学の得意なメンバーがそこに一緒に加わり共に考え進めることができた。

放課後支援に加え、秋からはCちゃんとKO君への個別支援が始まった。Cちゃんはその年に、KO君は翌年に受験を控えていたため、学校の先生から相談を受け、始めることにした。CちゃんとKO君にそれぞれ週に1〜2時間在籍している学級から抜けてもらい、受験科目である英語と数学の支援を行った。この個別支援にはYさんを含む3名の学生がかかわってくれた。

結果から述べると、私はこの個別支援のコーディネートを上手く行うことができなかった。子どもが欠席した場合、あるいは学生が大学の試験等でどうしても都合がつかず休む場合、支援自体が休みとなる。学校行事による時間割の変更も度々起きた。放課後支援は来ている子どもたちも多くこちらもチームで動いているため、子どもが欠席したり学生の都合が悪くなったりしても柔軟に対応できる。しかし、時間割のなかに入っての1対1の個別支援ではそれができない。また、支援にかかわる学生が孤独になる等の課題も浮き彫りとなった。

しかしながら、私が二つの異なる支援の調整に躓いている間も子どもには大きな成長があった。秋以降、Cちゃんは放課後の教室に来ないこともあったが、個別支援を担当している学生からはCちゃんの力が伸びているとの報告を受けていた。特に高校入試の英語の過去問題を解くスピードが上がり、自信を深めているとのことだった。個別支援と放課後支援の両方にかかわってくれているYさんも、私をはじめ放課後支援のメンバーに個別支援でのCちゃんの様子をよく報告してくれた。そのためCちゃんが放課後の教室に来なくても過度な心配をせず、Cちゃんがいつか来てくれることを待つことができた。受験が目前に迫りつつある年明け、Cちゃんは面接の練習シートを持って放課後の教室に現れた。Cちゃんは兄のK君が進学した定時制高校への入学を希望していた。その高校には英語や数学の他に面接試験がある。Cちゃんが持ってきた練習シートには、面接試験で質問されることが予想される項目が20ほど記されていた。Cちゃんは質問項目への模範解答を作成しており、それを覚えようと何度も声に出して読んだ。しかし何度目かの練習の際、「頑張っても覚えられない」、「自分は日本語が下手だ」と言って泣き出した。その様子を見た片川さんが、模範解答ではなくCちゃんの言葉で伝えられるよう質問に対する答えを一緒に書き直していってくれた。片川さんはCちゃんの今までの歩み、例えば中学2年生の時日本人の友達と上手におしゃべりができるように日本語の練習を頑張ったこと、日本語が分からず悔しい思いや寂しい思い、不安な思いをたくさんしたこと、そしてそれらを乗り越えて今ここにいることを一番よく知るメンバーである。片川さんはCちゃんと再びおしゃべりをしながら、中学生時代に頑張ったこと、この高校に入りたい理由、将来の夢などの質問項目を一つ一つゆっくり丁寧に、Cちゃんの言葉で伝えられるよう言葉を紡ぎ出していってくれた。

Cちゃんは無事志望校に合格した。前年、兄のK君たちは高校合格と同時に放課後の教室に来なくなったが、Cちゃんは合格した後も卒業するまでの間放課後の教室に顔を出してくれた。そして、来日して間もないAJちゃん、中学2年生のKO君、中学1年生のAちゃんとHちゃんに「自分のようにならないよう今からよく勉強しておくように」とアドバイスをしたり、片川さんら支援メンバーとおしゃべりをしたり数学の勉強をしたりして過ごした。

3）これまでの経験が通用しない（福井市H小学校）

2015年度は上述の支援に加え、10月から福井市H小学校（以下、H小学校）に在籍するE君とO君への学習支援が始まった。きっかけは、公益社団法人ふくい市民国際交流協会（以下、ふくい市民国際交流協会）と福井市教

育委員会が、私とH小学校をつないでくれたことによる。E君とO君は日本人の父親とフィリピン人の母親を持つ小学2年生の双子の男の子である。二人は日本生まれ日本育ちで、母親が日本語で二人を育てていることもありフィリピン語を理解しない。支援は週に1回月曜日の1時間目（45分）の時間に、E君とO君を在籍する学級から取り出す形で進めた。この時間二人のクラスでは国語の授業が行われており、E君とO君は最近国語の授業にあまりついていけていないとのことだった。E君とO君は一見日本語をよく話す。しかし、単語での会話が多く、少し考える問題になると「分からない」を繰り返す。また、O君は文字が逆さになる等の特徴があった。

二人がフィリピン語をほとんど理解しないため、支援は日本語で進めることにした。母語を梃子にしない支援は私にとって初めてのことであり、正直どうしたらよいか分からなかった。支援は私と教職大学院生のポーリンさんとで始めた。この年度は国語と算数を中心に行った。いずれも図や写真を用いたり、道具の操作を介したり、丁寧にやりとりしたりしながら進めた。毎回終わり5分前になると、2人は教室のなかでかけっこを始めた。その様子を見ながら、この支援で自分たちが彼らにどれだけのことができているのか分からず、焦りだけが募った。

そうしたなか、年度末にE君の担任の先生と話す機会があった。担任の先生は、最近E君が落ち着いてクラスでの学習に取り組んでいること、最近はできることがどんどん増え、作文もよく書くようになったことを教えてくれた。その先生は月曜日の1時間目に本プロジェクトによる支援があることが理由ではないかと話してくれた。週の始まりの時間に兄弟が一緒に彼らのペースで勉強できること、そのことがE君の1週間の安定につながり学力も伸びているのではないかとのことだった。毎回の1時間の支援をどうするかに悩んでいた自分にとって、担任の先生から語られるE君の成長、そして先生の見方は驚きであり、目から鱗であった。

4）2年目をふり返って

この年はより多くの子どもたちのことを思い、本プロジェクトを拡大しようとしたが、コーディネートがうまくいかず躓いた年だった。私はプロジェクトの拡大は、メンバーさえいれば実現できると勘違いしていた。また、福井市H小学校では、自分のこれまでの経験が通用しない経験もした。私は本プロジェクトの2年目をふり返った実践記録（半原2016）のなかで、その時の気持ちを次のように書き記している。

支援開始に先立ちE君とO君の担任の先生に話をうかがった。二人ともフィリピン語はまったく話さないこと、お母さんが（日本語を母語とする人からみれば）つたない日本語で子育てをしている様子だとのことだった。これまでの自分の経験からすると、どんなに弱くても子どもは自分の母語（お母さんの言葉）を持っているはずであり、E君とO君に母語（フィリピン語）と日本語で学習を進めることができると考えていた。［中略］支援初日照れくさそうに部屋に入ってきたE君とO君にポーリンさんがフィリピン語で挨拶をするが、二人はきょとんとしている。そこからポーリンさんがいくつかフィリピン語で話しかけるものの二人からはまったく返答がない。担任の先生のおっしゃる通り、E君とO君はフィリピン語が分からないのだと理解した。

その後、複数の公立小中学校で本プロジェクトを進めるなかで、E君とO君と同じように母語をまったく理解しない子どもたちにも出会い、またその他にも自分の既有の経験が通用しないことに直面している。その度にどうしたらよいか分からず立ち止まってしまうが、その際一人で判断するのではなく、学校の先生方や本プロジェクトのメンバーの見方や考え方を丁寧に聴き取るようにしている。そして、そのもとで調整を行い、上手くいかないと感じても、すぐそのアプローチを取り下げるのではなく、何度かやってみるなかで可能性や課題を探り、次の調整を行うよう心がけている。

コーディネーターとしてもがくものの、この年は自分がコーディネーターコミュニティの層のなかにいることに気づき始め、やや安堵できた年でもあった。コーディネーターコミュニティの一つ目の層は、福井大学教職大学院での院生およびスタッフとの協働探究である。同教職大学院の月間合同カンファレンスでは、現職の院生の先生方から学校づくりや教師のコミュニティづくりにおける挑戦や試行錯誤を聴くことができる。また、院生の長期実践研究報告書を読み解きながら、そこでの判断や知恵に触れることができる。二つ目の層は、私が運営メンバーとしてかかわっている福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」での公民館主事をはじめとする地域コーディネーターの方たちとの協働探究である。地域における極めて複雑かつ答えのない課題を、住民の力を培いながら解決するプロセスをつくりだす地域コーディネーターたちの実践およびその過程には大いに学ぶべきところがあり、励まされる。

福井大学教職大学院や履修証明プログラムにおいて学

校の先生や地域の支援者たちの実践とその省察の聴き取りを重ねるなかで、また自身も同じように実践を語り、ふり返り、記録するなかで、自分の実践がゆっくりと捉え返されていく。私は、自分よりずっと複雑な状況のなかで模索を続けている人たちが隣にいて、その方たちと共に学び合える環境のなかにいる。失敗し、不安が尽きない年であったが、この年はコーディネーターコミュニティに身を置けていることへの安堵とそこでの学びが、コーディネーターとしての自覚を保ち支える要となった。

また、この年度は福井大学の地域貢献事業に応募し採択され、多額ではないものの予算を得ての活動となった。交通費程度ではあるが、本プロジェクトにかかわってくれているメンバーに謝金を渡すことができ、教材や文具の補充ができた。計画書を作成し、予算を獲得し、運用する一連の経験のなかで、私自身本プロジェクトの意義を改めて考えることができ、その前進が可能となった。

３．プロジェクトをコミュニティとして捉え、コミュニティを培うために必要な要件を考え始める（2016 年度）

１）子どもが自身の支援を継続させていることに気づく（中国出身 M ちゃんへの支援）

2016 年度となり M ちゃんは小学 4 年生になった。母語支援の担当は前年度から引き続き王さんが、日本語支援は卒業した錦織さんに代わり王さんと同じ教育学研究科 2 年生の福家さんが担当してくれることとなった。福家さんは M ちゃんの支援では初めての男性の支援者である。王さんと福家さんの息の合った連携で支援は順調に進み、M ちゃんはあいかわらず休まずよく通った。

後期になり王さんが就職活動の準備で忙しくなったため、王さんの紹介で工学部の中国人の研究生が母語支援を担当してくれることとなった。新しい体制となった 1 月のある日、M ちゃんの提案で日本語のカルタ作りが行われた。日本語カルタの作成は、昨年度 M ちゃんが錦織さんと王さんと一度行っている。M ちゃんはその時に作ったカルタをきれいなポーチに入れ大切に保管していた。M ちゃんはポーチからかるたを取り出し、福家さんと新しい支援者である研究生と一緒に、カルタの札のバージョンアップを試み始めた。去年は書けなかった漢字を書き、英単語にも挑戦した。M ちゃんが新しい支援者と楽しそうにカルタをしているのを見て、M ちゃんの支援がここまで継続しているのは M ちゃんがいるからなのだと気づいた。M ちゃんの支援なので M ちゃんがいることは当たり前であるが、私はこれまで M ちゃんの支援が継続できている要因として、支援者である学生が次の支援者に引き継いでいることのみに注目していた。しかし、カルタ遊びで目にしたのは、M ちゃん自身がこれまで（前年度）の学習を新しい支援者と共有し、その支援者と共に学習を更新している姿だった。M ちゃんの支援の継続は、M ちゃん自身によっても推し進められている。

3 月、福家さんが卒業した。福家さんは次の支援者の一助になればと、M ちゃんの支援において作成してくれたすべてのワークシートを私にデータで送ってくれた。福家さん作成のワークシートには、M ちゃんの成長過程に寄り添ったたくさんの工夫が凝らされていた。そこには昨年度の錦織さんと同じく、福家さんのたくさんの試行錯誤とチャレンジの積み重ねがあることがうかがえた。

２）子どもと支援者の世代継承サイクルを考え始める（福井市 K 中学校の支援）

2016 年度、K 中学校の放課後の教室には中学 1 年生から 3 年生までの生徒が揃った。中学 3 年生になったフィリピン出身の AJ ちゃんと KO 君、中学 2 年生になった日系ブラジル人の H ちゃんと A ちゃん、そして新たに中学 1 年生で来日したばかりのフィリピン出身 N ちゃんである。N ちゃんの参加を、AJ ちゃんと A ちゃんが殊更喜んだ。AJ ちゃんは N ちゃんにフィリピン語で声をかけ、A ちゃんは英語と日本語とジェスチャーを駆使しながら N ちゃんに話しかける。二人とも N ちゃんのお姉さんのようであり、それはまるで前年度卒業した C ちゃんが自分たちにしてくれたことを年下の N ちゃんに行っているようでもあった。

この年度、本プロジェクトに K 中学校の卒業生である教育地域科学部の学生が加わってくれた。さらに、福井大学のグローバルハブ（Global Hub）の SC（Student Coordinator）たちがこの取り組みに賛同し手伝ってくれるようになった。SC は福井大学で国際交流活動を推進する学生たちで、異なる学年、異なる学部・研究科、多様な国籍のメンバーから成る。SC から常に 3〜5 人が K 中学校の支援に参加してくれるようになり、支援が一気に安定した。また、これまでインターンシップがあるため教職大学院の教職専門性開発コース（現在は、同コースは授業研究・教職専門性開発コースとなっている）の院生の参加は難しかったが、この年から 1 年生の佐藤琢磨さんが手伝ってくれるようになった。

子どもたちが中学 1 年生から 3 年生まで揃い、支援者である学生たちも学部 1 年生から大学院生までが揃った。その状況のなかで、私は次第に「世代継承サイクル」を意

識するようになった。正確には、私が意識するより先にそのサイクルがすでにまわり始めており、私の認識が追いついたといった方が適切かもしれない。中学 3 年生が中学 2 年生を、中学 2 年生が中学 1 年生を気遣い、放課後教室というコミュニティの継続の輪を廻している。それは支援者の学生間においても同じである。子どもと学生それぞれの世代継承サイクルが両輪となり、コミュニティが発展している。

私がそのような世代継承サイクルを意識し、それがコミュニティの発展のために大事であると思い始めた 11 月、中学 3 年生でフィリピン出身の KO 君が学校に来られなくなった。KO 君は、これまで打ち込んできた部活動を引退した秋以降、学校に来ることがだんだん難しくなり、11 月にはほとんど来ることができなくなってしまったのである。K 中学校の先生方と KO 君のことを相談した際、先生方から、まずは KO 君が週に 1 回放課後教室に来ることを目標にしたいこと、そのために前年度卒業した C ちゃんを放課後教室の支援メンバーにしてはどうかとの提案をいただいた。KO 君は C ちゃんを姉のように慕っていた。C ちゃんが来れば KO 君も放課後教室に来てくれるかもしれない。結局それは C ちゃんの都合がつかず叶わなかったが、世代継承サイクルを意識していた私にとってその意義は十分に理解でき、またそのような提案をしてくださった K 中学校の先生方に頭が下がる思いであった。

年末、福井大学にて冬休みの学習教室を 3 日間（12 月 26、27、28 日）開いた。それは K 中学校と N 中学校（後述）の子どもたちのために開設したものであったが、裏の意図として、そこに冬休みなら参加可能だと言う C ちゃんを誘い、KO 君に来てもらおうというのがあった。K 中学校の先生方も賛同してくださり、KO 君や放課後教室に来ている生徒たちがその学習教室に通いやすいようにと、K 中学校から福井大学までタクシーを用意してくださった。そうしたなか、ついに KO 君が C ちゃんと一緒にやって来た。KO 君はその教室に来ている外国にルーツを持つ他の子どもたちや、支援者である福井大学の学生たちとよく笑いよく勉強した。冬休み後、KO 君は K 中学校での放課後の教室に再び来るようになった。そして、本プロジェクトのメンバーらと高校受験のための勉強を頑張り、無事志望校に合格した。

3）探究的な学習に挑戦し、子どもの成長と学生の成長の連動性に目を向ける（福井市 H 小学校）

この年、福井市 H 小学校の支援に新しいメンバーが加わった。国際地域学部 1 年生の大戸彩未さんである。大戸さんが加わってくれたことで、E 君と O 君の支援は大きく前進することとなる。3 年生になった二人は変わらず勉強そっちのけで教室のなかを元気に走り回ったりするのだが、大戸さんは E 君と O 君が、絵と虫が好きなことに気づき、虫の観察をして気づいたことを 4 コマ漫画として絵と文章で書く学習を提案してくれた。また、ハロウィンの時期には、お化けを題材にした学習を考えてくれた。大戸さんの参加と提案のおかげで、E 君と O 君の学習は教科を横断するアプローチのものへと、少しずつ向かっていった。例えば、秋にはダンゴムシの観察からダンゴムシの特性（壁にぶつかったら右に曲がり、次は左に曲がる）を見つけ出し、「ダンゴムシ迷路」をつくった。そこから、ダンゴムシが移動した距離をもとに算数の学習（足し算）を行った。そのような学習の積み重ねのなかで、E 君と O 君はできなかった計算ができるようになったり、単語の羅列から文章で自分の気持ちや考えが表せたりするようになった。そうした二人の成長に気づき私に教えてくれたのも、大戸さんだった。

大戸さんは、将来日本にいる外国人の支援や日本語を教える仕事をしたいこと、国際地域学部では 3 年次に半年および 1 年間の長期留学をすることになっているが、E 君と O 君の支援を通じアジアに留学することを考え始めていると教えてくれた。子どもの成長と学生の成長が連動し合っていることを、E 君と O 君、そして大戸さんが教えてくれた。そこから私は、このプロジェクトを通じ子どもと支援者の両者がより良く成長し合うことをどうコーディネートできるかを考えるようになった。

4）コーディネーターコミュニティを意識する（福井市 N 中学校での支援）

2016 年度、新たに福井市 N 中学校（以下、N 中学校）で、フィリピンから来日したばかりの中学 2 年生 M ちゃんへの学習支援を始めることとなった。N 中学校では M ちゃんが、おそらく初めての外国籍の生徒であるとのことだった。N 中学校は福井大学からバスで 50 分ほどの遠方にある。支援に行って帰ってくると半日かかることから、支援者のチーム編成には工夫が必要だと思った。

M ちゃんはフィリピンでは英語で教育を受けており、フィリピン語よりもむしろ英語を学習言語としている生徒であった。そのため支援のはじめの時期は、英語を話す留学生に支援をお願いしたいと思った。幸い長期間は難しくても短期間であれば参加できるという交換留学生が数名いた。週毎や月毎に担当を決め、M ちゃんへの支援

を開始した。週や月毎に担当が変わることを少し案じたが、N 中学校の先生方と M ちゃんはむしろそうした変化を楽しんでくれた。特に、教頭先生は支援をよく見に来てくださり、また支援後に留学生を M ちゃんの学級の給食に誘ってくださった。おかげで、留学生は N 中学校の生徒たちとの交流も楽しむことができた。また、教頭先生は支援の様子を、私に丁寧にメールで知らせてくださった。そうした教頭先生とのやりとりのなかで、私は教頭先生が一緒に学生の成長を見守ってくれていることに気がついた。その気づきから、自分が一人で学生を見守るのではなく、学校の先生と共に見守るという視点を持つようになっていった。

4 月から 9 月まではいろいろな国の留学生が M ちゃんの支援を担当してくれた。交換留学生の多くは、10 月に来日して 9 月に帰国する。支援にかかわってくれた留学生たちとの話のなかから、日本の生活に慣れた 4 月から 9 月すなわち留学期間の後半は社会的な活動に参加しやすく、またそのことを希望している学生が多いことが分かった。10 月以降すなわち留学生の入れ替わりの時期であり、留学生たちは日本の生活に慣れることに一生懸命なときは、SC のメンバーが N 中学校の支援に力を貸してくれた。特に、教員採用試験が終わった 4 年生の日本人 SC が M ちゃんの支援にかかわってくれた。

N 中学校は大学から遠く、私が毎回同行して学生のサポートをすることが物理的に難しい。はじめは不安だったが、教頭先生が一緒に学生を見守ってくださることで、不安が次第に安心へと変わっていった。「教頭先生は本プロジェクトの応援団である」という認識に至った時、本プロジェクトは私一人がコーディネーターではないのだと安堵した。以来、学生とのコミュニケーションを大事にするのはもちろんであるが、教頭先生とのコミュニケーションを殊更大事にするようになった。教頭先生とのより良いコミュニケーションは、自身のコーディネーターコミュニティを耕すことでもあり、そのことはひいては子どもと本プロジェクトのメンバーである学生のより良い成長を支えることにつながるのである。

５）多様な専門家との協働の必然性に気づく（福井市 J 小学校）

2016 年度は福井市 J 小学校（以下、J 小学校）での支援も始まった。来日したばかりの中国出身で小学 1 年生の R 君への支援である。R 君は身体的な特性を含め、いくつかの点で特別な支援を必要とするお子さんであった。私にとって特別な支援を必要とする子どもへの支援は初めてのことであり、学校や関係機関、保護者とのより一層の連携が必要になると思った。

10 月から始まったこの支援には、上海からの交換留学生と科目等履修生の宋さんが力を貸してくれた。はじめは R 君が在籍する学級に二人が入り込む形だった。教室を飛び出す R 君につき添ったり、先生の言葉を R 君に中国語で伝えたり、心配して学校にやって来るお母さんと情報交換をしたりすることなどを行った。しばらくして、R 君は特別支援学級に移ることとなった。以降同じ入り込みのスタイルではあるものの、支援者の二人は、実際は特別支援学級全体にかかわるような形となった。特別支援学級に在籍する子どもは、R 君を入れて 4 名である。3 名の子どもたちは一番年少の R 君を気にかけ、また留学生と宋さんをよく慕ってくれた。特別支援学級の担任の先生や特別支援コーディネーターの先生も留学生と宋さんとよくコミュニケーションをとってくれた。J 小学校での支援は、特別支援学級の担任の先生、R 君、3 名の子どもたち、留学生、宋さん、お母さん、そして特別支援コーディネーターの先生が、さながらチームとなって動いているように見えた。J 小学校を訪れた際、私は留学生と宋さんだけでなく、できるだけ「チーム」の全員と話をするよう心がけた。

特別な支援が必要な子どもへの支援ということで、判断に迷った時は、特別支援教育が専門で同僚の笹原未来先生に相談した。そして、いただいた視点やアドバイスをもとに、留学生と宋さんと一緒に R 君の支援のあり方を検討したり見直したりした。留学生と宋さんの話を聴くことも大事にした。二人いわく、中国には「特別支援教育」というものがないとのことである。二人は戸惑いや不安を私に率直にぶつけてくれるとともに、R 君の日々の成長を喜び、嬉しそうに報告してくれた。

６）3 年目をふり返って

この年は、遠方にある N 中学校、そして特別支援が必要な R 君（J 小学校）への支援という、「初めて」を二つ経験した。数年前の私だったら、いくつかの支援が走っているその上に、この二つの新しい支援を始める決心はつかなかっただろう。支援が拡大することに対し、不思議と「怖い」という感覚はそれほどなかった。いや、その感覚はあったが、自分のなかで次第に調整されていったという方が正しいかもしれない。それは 12 月に明治大学で行われた「実践研究東京ラウンドテーブル」で、東京学芸大学の倉持伸江先生と、倉持先生の授業を履修する学生が取り組む社会教育活動の受け入れ先の方とのやりとりを

聴いたことが大きい。

倉持先生の授業では、学生が社会教育をテキストで学ぶのではなく実践しながら学んでいる。学生の人数はかなりの数にのぼり、市町を越え広域で活動している。東京ラウンドテーブルで、私は倉持先生と、その活動の受け入れ先の一つである、ある機関の代表の方と同じテーブルになった。「明日から学生がお世話になります」と挨拶する倉持先生に、その受け入れ先の方が「任せてください。学生さんたちを受け入れるためにきちんと組織をつくってあります」と答えていた。そのやりとりを聞いた時、個人と個人ではなく、コミュニティとコミュニティが出会い協働実践を行っているのだと思った。倉持先生は学生のコミュニティ（組織）を耕し、受け入れ先の方はそこでのコミュニティ（組織）を耕している。それぞれのコミュニティにおいて、多様な年齢、興味、関心、意見、背景を持った人たちが集まり、経験や世代の継承サイクルを意識した学習が展開されている。私は倉持先生に、プロジェクトが拡大していくなかだんだん目が届きにくくなっていること、何か起きたらどうしようと思っていることなど、自分の不安を打ち明けた。すると、倉持先生は「私も不安で怖いですよ」と共感してくださった。私から見れば、倉持先生の実践は何も危なげないように見えた。しかし、やはり同じ気持ちを持っておられ、そのなかで過度に心配し活動を小さくまとめたり管理したりしようとするのではなく、学生のコミュニティ、コーディネーターコミュニティを耕すことで活動を展開されている。以来、私もプロジェクトを「拡大する」方向性を眼差しながら、学生たちのコミュニティ、さらには自身のコーディネーターコミュニティを耕すことを考えている。

4. プロジェクトの発展のため、分散型コミュニティを意識した実践を行う（2017 年度）

2017 年度は上記支援に加え、新たな支援がいくつか始まった。開始した順に、福井市 P 小学校、福井市 M 小学校、福井市 M 中学校、福井市 E 小学校、そして越前市武生南小学校である。ここまで継続してきた M ちゃんへの支援、福井市 K 中学校、福井市 N 中学校、福井市 J 小学校への支援は、いずれも継続して行われた。ここでは、主にこの年新しく始まった支援の動きを書いておく。

１）福井大学の学生以外の支援者による支援（福井市 P 小学校）

P 小学校に、中国出身の 6 年生の O 君が転入してきた。学校より O 君は日本に来たばかりで、まったく日本語を話さないとの相談をいただき、4 月から学習支援を開始することとなった。本支援には J 小学校で支援をしてくれている宋さんと、福井工業大学の学生がかかわってくれることとなった。福井工業大学の学生は、中国にルーツを持つ K さんである。中学生の時に来日して以来ずっと福井におり、高校、大学と進学している。自分も子どものとき大変な思いをしたからと、本支援に快く力を貸してくれることとなった。宋さんは、中国では日系企業に勤めており、日本人の男性との結婚を機に来日し福井に住んでいる。前年度は福井大学の科目等履修生だったが、2017 年度は履修していない。つまり、P 小学校での支援は、福井大学の学生ではない二人が進めてくれることとなった。

O 君への支援は、はじめは取り出し支援の形から始まった。そこでは、加配の日本語指導の先生と宋さん、K さんが協力し、主に日本語や国語の学習支援を行った。しかし O 君が、家庭科が好きなことから、家庭科の授業に入り込むうちに、次第に宋さんと K さんが他の教科においても O 君の学級に入り込む形で支援を行うこととなった。宋さんと K さんとで時間をずらしながら（宋さんが 1 時間目と 2 時間目、K さんが 3 時間目と 4 時間目）週に 1 回、半日の支援を行った。宋さんは授業中 O 君の隣に座ったり後方から見守ったりするスタイルで、K さんは O 君には友達が必要との思いから授業中のサポートに加え、休憩時間中に O 君とクラスの友達とのやりとりをつなぐ働きかけを行っていた。

P 小学校での支援で特筆すべきことに、O 君の担任の先生と宋さん、K さんの連携により異文化理解教室が行われたことが挙げられる。担任の先生は O 君を常に気にかけ、O 君の行動に違和を覚えてもすぐに判断せず、行動の背景にある文化や習慣を理解することに努めていらっしゃった。担任の先生の企画で、6 月に「O 君のことをもっと知ろう」という目的で、担任の先生、宋さん、K さんとが協力し、異文化理解教室を行うこととなった。当日は O 君のクラスだけではなく、6 学年の子どもたちみんなが集まった。宋さんによって中国の文化や習慣、学校生活が紹介され、O 君が中国の学校でよく行っている体操を紹介した。O 君は恥ずかしがりながらも、みんなが中国のことを知ろうとしてくれていることを喜んでいる様子だった。異文化理解教室終了後、クラスの友達が O 君に「放課後遊ぼう」と声をかけており、それに O 君が笑顔で応じていた。

4 月に日本語がまったく分からない O 君が転入してきて、担任の先生も子どもたちも、そして何より O 君が頑

張り、この 6 月の異文化理解教室が学級の再出発となる予定だった。しかし、O 君は 7 月に急遽中国に帰ることとなった。O 君は学校が大好きだったが、やはり馴れない土地での生活は、彼にとっては大変だったようだ。日本にいる親の元から離れ、中国の親戚を頼りに中国で進学するという彼自身の決断であった。担任の先生も P 小学校の先生方も、O 君の帰国を心から寂しがっていた。O 君は先生や友達への感謝の気持ちを中国語で書き、それを宋さんと K さんが日本語に訳しみんなの前で伝えた。それは O 君の真心がこもった、とても温かい手紙であった。こうして O 君の支援は、短い期間で終了となった。

2）教員研修留学生の参加（福井市 M 小学校）

2017 年 9 月に福井市 M 小学校の校長先生から連絡があり、同校の小 3 と小 1 のフィリピン出身の姉弟に支援を行うこととなった。特に小 3 の K ちゃんが、授業中固まってしまうそうで、先生方が心配されていた。支援は週に 1 回、月曜日の 1 時間目と 2 時間目の時間帯にうかがい、二人を在籍級から取り出す形で、英語と日本語で国語の学習を行うこととなった。うちではフィリピン人の両親と英語で会話をしていること、そして二人がまだ幼く、英語を忘れてしまう（ダブルリミテッドの恐れがある）との判断から、この形を取ることにした。本支援には、教育地域科学部 3 年生の伊藤瑛里さん、国際地域学部 2 年生の安藤朱音さん、そしてブータンからの教員研修留学生の S さんが力を貸してくれることとなった。後に、国際地域学部 2 年生の遠藤優海さん、工学部 3 年生の T さんが加わることとなる。

教員研修留学生という制度であるが、それぞれの国や地域の学校の先生が、最大 1 年半国費留学生として日本で研究活動を行うものである。S さんは、ブータンの理科の先生である。これまで多くの留学生が本プロジェクトに参加してくれており、過去に教員研修留学生が力を貸してくれたこともあったが、本格的にかかわってくれたのは S さんが初めてである。これまでの教員経験にもとづく S さんの K ちゃんと J 君への接し方に、私も日本人学生もたくさんの刺激を受けた。S さんは日本人学生との協働を楽しみ、責任を持ってかかわってくれた。海外の現職教員である教員研修留学生の参加により、本プロジェクトにおけるコミュニティメンバーがさらに多様になったと感じた。

姉の K ちゃんと弟の J 君はとても仲が良い。しかし、支援中喧嘩をすることもしょっちゅうで、勉強どころではなくなってしまうこともある。S さんも日本人学生たちも、二人のそうした様子を温かく見守ってくれる。兄弟喧嘩も休憩中のお絵かきやかくれんぼも、本支援における大事な出来事であり、そこから彼らの成長が見てとれることもある。一見些細にみえる出来事や状況も、M 小学校の支援者間で丁寧に共有するようにしている。

3）工学部の学生による支援（福井市 M 中学校）

10 月にふくい市民国際交流協会より、M 中学校のフィリピン出身の女の子 M さんへの学習支援の打診をいただいた。越前市から福井市に転入してきた生徒だという。M 中学校の校長先生および教頭先生とも相談し、早速 M さんへの支援を開始する運びとなった。

M さんは英語が堪能であることから、英語が得意な工学部 2 年生の T さんにお願いをしてみたところ、快諾してくれた。T さんは、これまで夏休みや冬休みの学習教室を手伝ってくれていた。工学部の学生は、これまで時間割の違いや実験等の関係により、教育地域科学部および国際地域学部の学生との協働がなかなか叶わなかった。今回も、T さんの予定に合わせるとその調整が難しかった。そのため、T さんに同じ工学部の学生を誘ってもらったところ、同じゼミの S さんが興味を持ってくれたとのことで、本プロジェクト初の工学部の学生のみによるチーム（ペア）が誕生した。

M 中学校の教頭先生からは、二人がとても熱心に取り組んでくれていること、M さんが二人に心を開きいろいろ話しているようだとうかがった。M さんがいつもと違う様子であれば、二人は教頭先生に報告し、ある時その情報がきっかけで、担任の先生が学級で M さんをフォローできたことがあるという。私が、なかなか顔が出せない支援の一つであるが、教頭先生が見守ってくださっており、二人に安心して任せることができている。

4）支援を行った生徒が支援者として参加する（福井市 E 小学校）

2017 年の冬、福井市 E 小学校の教頭先生より、同校に小 3 と小 1 のフィリピン出身の兄弟が転入してきたとの連絡があった。その兄弟はフィリピンのある地方の出身で、その地方の言葉（方言）を話す。タガログ語や英語を話す日本語ボランティアがいるふくい市民国際交流協会も、二人がその地方の方言のみを話すため、支援が難しい状況であるとのことだった。幸い福井大学に、二人と同じ出身のフィリピン人留学生を見つけることができた。工学研究科の M さんである。しかし M さんは、平日は実験や研究で忙しく、E 小学校に赴き支援を行うのは現実的

ではなかった。

そこでE小学校の二人の兄弟には、二つのサポートを考えた。一つは、ふくい市民国際交流協会が隔週の木曜日の放課後に開講している「日本語サポートクラス」への参加、もう一つは、土曜日に福井大学でMさんと一緒に学習するというものである。幸いE小学校を通じ兄弟の母親に連絡を取ったところ、平日の夕方と土日なら送迎が可能とのことだった。こうして、E小学校の二人の兄弟への支援が始まった。

ふくい市民国際交流協会の日本語サポートクラスには、前述の福井市M小学校のフィリピンの姉弟が通っている。ともに学年が同じ二つの家庭の兄弟が出会うことで、子どもたちにとっても、保護者にとっても、良い影響をもたらしていることと思う。また、土曜日の福井大学の支援には、Mさんの他に福井市K中学校の卒業生で現在市内の高校に通うフィリピン出身のAJちゃんが協力してくれることとなった。支援を行った生徒が支援者となってくれる日がこんなにはやく訪れるとは、夢にも思っていなかった。

二人の兄弟は、どこか特別な場所にでも出かけるようなテンションで大学にやってきて、MさんとAJちゃんとおしゃべりしたり、算数や漢字の勉強をしたりしながら楽しそうに過ごした。次年度、E小学校での支援が始まることになるのだが、土曜日クラスの間は、E小学校とは、教頭先生に二人の様子を定期的に伝えることでつながっていた。

5）福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースの院生の先生との連携（越前市武生南小学校）

2016年度、福井大学教職大学院の学校改革マネジメントコースに越前市武生南小学校で教務主任をされている加畑重樹先生が入学された。越前市は福井県内において外国人住民が最も集住する地域であり、武生南小学校は、全校児童の約1割が外国にルーツを持つ子どもという特徴を持つ学校である。加畑先生は多文化共生の学校づくりを展望し、校内研修の充実やカリキュラムの編み直しに取り組まれておられた。

本プロジェクトは、これまで福井市の学校を中心に展開してきた。しかし、2017年度は加畑先生との連携のもと、武生南小学校でも学習支援を試みる運びとなった。遠方であること、そして子どもたちの人数も多いことから、日時を決め、放課後に小さな教室を開くスタイルをとった。支援者は、通常の支援は授業があり難しいが、そのときどきの支援であれば参加したいと言ってくれていた学生に声をかけた。当日は、子どもたちと学生が一緒に宿題をしたり遊んだりして、良い時間を過ごしたと聞いている。

当初の計画では4半期に一度ずつぐらい行う予定だったが、コーディネートがうまくできず、結局二回行うに留まった。主に教育地域科学部の学生が武生南小学校への支援を希望してくれたのであるが、学生たちは教員採用試験や教育実習の時期は参加が難しかった。これまでの経験から、留学生については年間のスケジュール等を把握し調整できるようになっていたが、日本人の学生については自分の把握が十分ではなく、結果武生南小学校への支援がイベントのような形になってしまった。加畑先生にはとても申し訳なく、大いに反省するところである。一方、これまで自分が取り組み進めてきた活動が、教職大学院の院生の先生の学校づくりと結び合い連携できたことは、貴重な経験であった。今後、外国籍住民の増加により、教職大学院の院生の先生方の学校においても、外国の子どもが増えることが予想される。その時に、その先生とより十分な連携・協働ができるよう、本プロジェクトのコミュニティを耕し成長させておきたい。

6）4年目をふり返って

この年は、その前の年に掴んだ「コミュニティ」の視点と知見を活かし、プロジェクトに取り組んだ年であったと思う。言い方を変えれば、それができる土壌があり、感謝の念を強く感じた年だった。福井市P小学校の支援では、福井市J小学校で経験を積んでいる宋さんがイニシアチブを取ってくれた。福井市M小学校の支援では、教師経験を持つ教員研修留学生の存在が大きい。福井市M中学校の校長先生は、長年支援が継続している福井市K中学校の元校長先生であり、本プロジェクトを初期の頃から応援、理解してくれている方である。福井市E小学校の兄弟の支援には、かつて支援をしていた生徒が支援者としてかかわってくれた。越前市武生南小学校は、福井大学教職大学院の院生の先生が教務主任をされている学校である。

私は、それぞれの支援（コミュニティ）における協働と判断を深く信頼し、それぞれが分散型のコミュニティであるとの認識から、前年度よりもう一歩も二歩も下がり、本プロジェクト全体を見渡しながら、それぞれの支援（コミュニティ）の状況を見守り調整するよう努めていたように思う。それは、はじめから分散型コミュニティを耕そうとして取り組んだことではないのだが、こうしてふり返ってみると、前年度に増し、活動先が増えているにもか

かわらず、本プロジェクトの2年目に経験したような「プロジェクトを拡大しようとして調整に失敗する」事態が起きていない。そのため、この年の自分の実践はそうであったと言えるだろう。

また、この年は、本プロジェクトにおいて福井大学教職大学院にかかわる先生方に出会えたり、出会い直すことができたりした年でもあった。越前市武生南小学校については先述の通りだが、その他にも、2015年度より支援を行っている福井市H小学校には、福井大学教職大学院の修了生の先生が教頭として着任され、これまで以上の連携ができている。また、この年より支援を開始した福井市M小学校には、教職専門性開発コースを修了した院生が新採用の教諭として着任しており、時々教室に来ては、さりげないサポートをしてくれる。支援にうかがう学校が増え、私が毎回は行けなくても、それぞれの学校で先生方が学生を見守ってくださっている。「分散型コミュニティ」を支えてくれている「コーディネーターコミュニティ」がある。私が東京ラウンドテーブルで目にした、東京学芸大学の倉持先生と、倉持先生の授業を履修する学生の活動受け入れ先である代表の方との間の、＜「お願いします」「任せてください」＞のやりとりが、自身の取り組みのなかでも生まれつつあることを、とても有り難く思う。

5．本プロジェクトが次のサイクルに向かいつつあることに気づく（2018年度）

2018年度は、これまで増加の一途を辿っていた支援に行く学校数が少し落ち着いた年となった。ここでは、2018年度に支援が継続されなかった二つの支援を報告する。あわせて、これまでとは少し異なる新たなコミュニティも誕生したので、そのことも記しておく。また、この年度は、本プロジェクトを発信するいくつかの機会に恵まれた。その機会は、私にとって大切な意味を持つため、そのことも記しておく。

1）コミュニティが収束する

a. 生徒の卒業により支援が終了する（福井市N中学校）

2017年度の3月、N小学校のフィリピン出身のMちゃんが卒業した。来日したばかりのMちゃんへの学習支援が始まったのが2016年度の6月で、以来約2年間に渡りMちゃんへの学習支援が続いてきた。MちゃんはN中学校で、友達に恵まれ、先生に恵まれ、充実した学校生活を過ごしたと、本プロジェクトのメンバーから聞いている。教頭先生のお心遣いで、私はMちゃんの卒業式に出席する機会にも恵まれた。

Mちゃんは第一希望の高校に合格し、2018年4月から高校生になった。また、これは奇遇で、私もN中学校の先生方も、そしてなにより本人たちが驚いているのだが、Mちゃんの支援にかかわってくれていた福井大学教育地域科学部の学生が、Mちゃんが進学した高校の教員となった。高校でMちゃんは何か困ったことがあると、その先生のところに相談に行っているそうだ。Mちゃんは、将来医者かエンジニアになりたいという夢を持っている。大学進学に向け、高校での勉強を頑張っていると聞いている。

N中学校での学習支援のきっかけを作ってくれたのは、ふくい市民国際交流協会の辻端聡子さんである。N中学校の支援終了にあたり、当時（2016年5月）、辻端さんよりいただいたメールを読み返した。

お世話になっております。N中学校にフィリピンからきた女子生徒が転入しました。今日打ち合わせに行ってきたのですが、教頭先生がいろいろなサポートをお願いしたいととても熱心な方でした。

半原先生の取組についてもお話したところぜひコンタクトをとりたいとのことでしたので、半原先生の連絡先をお教えしてよろしいでしょうか。

当該生徒ですが、本来なら中学3年生なのですが学年を1学年落とし、2年生のクラスに入っています。タガログ語、ビサイア語、英語、3つの言葉が話せます。日本語はゼロレベルです。こちらからは、月・木に各2時限ずつ指導に入っています。

N中学校はとても遠いので、学生さんの負担が大きいかと思いますが、もしどなたか行ってもいいという方がいらっしゃいましたらお願いできればと思います。

以上どうぞよろしくお願いします。

ふくい市民国際交流協会は、福井市教育委員会からの委託で、外国から日本に来た子どもたちの日本語初期指導を行っている。辻端さんは、本プロジェクトと学校とを結んでくれるキーパーソンである。辻端さんのおかげでN中学校での支援が始まり、教頭先生をはじめとする先生方のご理解とご協力のもと、無事に支援を終了することができた。Mちゃんの高校進学後も、上述のように、Mちゃんと本プロジェクトのメンバーのつながりが続いていることを嬉しく思う。

b. 児童の成長により支援が終了する（福井市J小学校）

2016年度より始まった福井市J小学校でのR君の支援

が、2018 年度は継続しなかった。その原因をつくったのは、私である。主に中国人の留学生のメンバーがJ小学校の支援を引き継いでくれていたのだが、2017 年度に担当してくれていた留学生が、研究のため 1 年間ヨーロッパに行くことになり、その後任選びがやや難航した。新年度（2018 年度）となり、J 小学校のことが気になりつつも日々の忙しさを言い訳にしてしまい、私が J 小学校に連絡をとったのが 2018 年度の秋学期開始時であった。

私の非礼を J 小学校の特別支援学級の先生や特別支援コーディネーターの先生方は優しく受け止めてくださった上で、相談の結果、2018 年度は本プロジェクトによる支援は継続しないという判断をされた。R 君はこの半年間、中国人の支援者がいない状況のなか、特別支援学級の先生方やクラスの仲間と一生懸命日本語でコミュニケーションを取り日本語がかなり上達したこと、また弟が生まれお兄さんとしての自覚からずいぶん成長したそうだ。そのため、今は中国語によるサポートがなくても、自立的で安定した生活や学習ができているため、中国語による支援はひとまずなくて良いだろうという判断に至ったとのことである。もっともな判断だと思った。R 君は、この年度は小学 3 年生で、中学年となっている。今後また、R 君や学校の先生方が本プロジェクトによる支援を必要とした際力になれるよう、プロジェクトの存続と継続を大事にしたい。

2）新たなコミュニティが生まれる（福井市 T 小学校）

気になりながら、なかなか連絡ができていなかった学校がもう一つある。福井大学から徒歩圏内にある T 小学校である。2017 年度秋、T 小学校にインドネシアの女の子が転入してきた際校長先生より連絡をいただいたのだが、当時福井大学にインドネシアの留学生がおらず対応ができないでいた。2018 年度となり、日本語が堪能なインドネシアの交換留学生が福井大学にいることを知った。国際センターの桑原陽子先生の紹介で、その留学生とコンタクトを取り、T 小学校に連絡をしたのが 2018 年度の秋学期に入ってからのことだった。対応に、実に一年もかかってしまった。

申し訳ない気持ちで T 小学校に連絡をし、非礼を詫び、今更ではあるがインドネシア人留学生のサポートが必要かどうかを校長先生にたずねたところ、その女の子のご両親の快諾を得た上で是非ということであった。校長先生は私が覚えていたことの礼を述べてくださった上で、その女の子が、この一年の間でみるみる日本語が上達し、現在学習面も生活面も問題がないこと、しかし、父親の留学で来日しており数年後インドネシアに帰ることが決まっているため、インドネシアとのつながりを大事にしてほしいこと、そして自分と同じ言語・文化を持つ人との時間は、その女の子のさらなる安定につながるだろう、という校長先生自らのお考えを伝えてくださった。

外部からの支援を受け入れること、それも現在問題を抱えていない児童のためにその門戸を開くことは、正直学校にとって大変なことだろうと思う。なぜなら、外部（私たち）のサポートが入ることにより、学校はいろいろな調整を行わなければならないからだ。そうであっても、「その子のためになる」と、外部との連携を積極的に図っていかれるその姿勢に、頭が下がる思いであった。

また、T 小学校を実際に訪ね、校長先生と話したり、学校内を見学したりして分かったことであるが、T 小学校は国際化に先駆的に取り組んでいる学校の一つであった。福井市内の ALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）の拠点校にもなっており、学校内の英語教育の充実をはじめ、子どもたちの多様性を尊重した教育を行っている。校長先生も英語がご専門で、生徒や教員の「異なり」や「多様性」を大事にしながら、その雰囲気や外国人とのコミュニケーションを楽しんでいらっしゃる。

そうした温かな雰囲気のなか、月に 2 回程度インドネシア人留学生が T 小学校を訪れ、その女の子と交流をすることが始まった。50 分という短い時間ではあるが、留学生とその女の子はインドネシア語で学校での出来事を話したり、本を読んだりと、和やかな時間を過ごしている。女の子は表情豊かでよく笑い、その留学生を姉のように慕っている。その時間を、校長先生をはじめとする T 小学校の先生方が見守ってくださっている。そして、校長先生は、その留学生とのコミュニケーションも楽しんでくださっている。

留学生は、2 月に 1 年間の留学を終え帰国した。自分の帰国に際し、次にインドネシアの二人の留学生を紹介してくれた。現在、その二人と私とのやりとりが始まったところである。

3）本プロジェクトの発信の機会を複数得る

2018 年度は、本プロジェクトの発信の機会を複数いただいた。一つは福井大学の授業において、もう一つは日本語教育学会北陸支部集会においてである。

a. 大学の授業

大学の授業では、国際センターの桑原陽子先生が、数年前からご自身が担当する「多文化コミュニケーション」の

授業で、本プロジェクトを紹介する機会をくださっている。本プロジェクトが開始して間もない頃から授業に呼んでくださり、年度を重ねながら本プロジェクトが発展していることを、まるでご自分のことのように喜んでくださっている。桑原先生の「多文化コミュニケーション」の授業は、日本人学生と留学生が受講しており、これまで本授業での報告がきっかけで、プロジェクトに参加してくれた学生も多い。2018 年度も報告の機会をいただいた。

また、2017 年度から、教育学部の本田安都子先生が「国際理解基礎」の授業で、本プロジェクトを紹介する機会をくださっている。将来教員になることを志望している教育学部の学生に、本プロジェクトを紹介できる意義は大きい。学生は、「将来教員になった時、自分のクラスや学校に外国の子どもがいたら」と、本事例に真剣に向き合い検討してくれる。本田先生は学生のふり返りシートを共有してくださるのだが、そこに書かれている学生のふり返りやコメント、そして本田先生の本プロジェクトへの示唆は、私にとって大きな励みとなり智恵となっている。

さらには、2018 年度から、教育学部長の石井バークマン麻子先生の「インクルーシブ教育特論」の授業で、本プロジェクトを紹介する機会をいただいている。インクルーシブ教育という大きな枠組みで本プロジェクトを位置づけ直していただけることは、本プロジェクトの意義や価値の発展へとつながり、目から鱗のことが多い。また、石井バークマン先生は、10 年後 20 年後を見据えた大胆なアイデアをくださり、協力を申し出てくださっている。

いずれの先生も、自分事として本プロジェクトのことを考え、学生の成長を一緒に喜び、コーディネーターである私の気持ちに寄り添ってくださる。先生方の授業における本プロジェクトの紹介は、ただの発信ではなく、私にとって貴重なふり返りの場となっている。

b. 日本語教育学会北陸支部集会

私が所属する公益社団法人日本語教育学会は、地域における日本語教育の普及・推進・活性化を促進するための支部活動事業を、2017 年度より展開している。北陸支部は石川県、富山県、新潟県、福井県（あいうえお順）から成り、2018 年度の北陸支部活動は福井で行われた。福井で日本語教育学会関連の活動が行われるのは、2014 年以来のことである。

従来の日本語教師研修においてしばしば採用されがちな講演型の形式は取らず、実践者が互いの事例から学び合いたいと考えた。そのため、シンポジウムでは、多文化共生および留学生教育におけるコーディネーターとして、ふくい市民国際交流協会の辻端聡子さん、福井大学の桑原陽子先生、そして半原が自らの実践を報告することとなった。会の進行は、福井大学連合教職大学院の隼瀬悠里先生が務めてくださった。

特筆すべきは、当日の様子やそこに至るまでのプロセス、企画後のふり返り、そしてその後のそれぞれの実践の展開を、辻端さんと桑原先生と半原の共著で記録として残せたことである（半原・辻端・桑原 2019）。本プロジェクトの継続と合わせ、プロジェクト継続の要となっている記録の重要性を、このプロジェクトにずっと協力・同行してくれている辻端さんと桑原先生と共に記録を書くことにより提起できたのは、私の財産である。

4）5 年目をふり返って

本プロジェクトの 4 年間をふり返った実践記録（半原 2018）で、私は「2018 年度を第一サイクルの最終年度と位置づけ、次の第二サイクルとしての 5 年間に向けた展望を掴む一年にしたい」ということを述べている。正直、私は 5 年間を一つのサイクルとして捉えた実践に取り組んだ経験がなく、2018 年度を第一サイクルの最終年度としたものの、何をしたらよいのか、何が起こるのか、検討がつかないでいた。

しかし上述したように、この年度、コミュニティに変化が起きた。「収束」と表現したが、これまで増加の一途を辿ってきた本プロジェクトが、子どもの卒業や成長により、支援にうかがう学校数という数的な部分にのみ着目すれば、少し落ち着いた。ただ、このことは自然の流れであり、5 年間続けていればこうしたことが起きるのだと、冷静に受け止められる自分がいた。以前の私だったら、「こんなに本プロジェクトへの参加を希望してくれている学生がいるのに、支援に行く学校数が減ってどうしよう」と、慌てふためいたかもしれない。実際学生の方も、支援を行う学校数が減るタイミングで、本プロジェクトの中核を担ってくれているメンバーが長期留学や就職活動等で忙しくなった。そのため、仮に私が上記のような心配をしたとしても、それは徒労に終わるものであった。

このようなことが起きるのが最終年度なのだろうかと思っていた年末年始、次のサイクルに向けた大きな動きがやってきた。一つは、日本語教育界を大きく揺るがすニュースである。2018 年 12 月 8 日に外国人労働者の受け入れ拡大を図る「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、2019 年 4 月から施行される運びとなった。このことにより、日本にはかつて経験したことがない人数の外国人がやってくること

になる。現在、外国人労働者の受け入れに向け、日本語能力の判定や日本語学習プログラムの内容、実施機関、日本語教師の確保等を早急に行う必要性が叫ばれ、その整備に向けた動きが進んでいる。今後外国にルーツを持つ子どもたちはますます増え、その背景も状況もより多様に複雑になることが予想される。

二つ目は、外国にルーツを持つ子どもの背景の多様化および複雑化とかかわる動きになると思われるが、県内のある福祉施設の方から連絡をいただいた。現在どのように連携できるかを模索中であるが、本プロジェクトが多様な子どもたちの学習を支えられるようもっと力をつけていかなければならず、そのために自身のコーディネーターとしての力量をさらに培いたいと強く思う出来事であった。

Ⅲ. 次の 5 年間（第二サイクル）に向けて

福井の外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトは、2019 年度、第二サイクルに入った。第二サイクルへと突き動かしてくれた二つの出来事を上に記したが、もう一つ、本学国際地域学部のケリー・キング先生が、ご自分の PBL（Project-Based Learning）の授業で、本プロジェクトをサービスラーニングの一つとして位置づけてくださることとなった。したがって、今後国際地域学部の学生が、授業の一環として本プロジェクトにかかわってくれることとなる。ケリー先生とは数年前からこのことを、「いつか実現できたら」と語り合ってきた。本プロジェクトが、ケリー先生の PBL で取り上げてもらえるまでに成長でき、ケリー先生および国際地域学部の学生との協働探究が始まったことを嬉しく思う。

次の 5 年間は、社会の激動と相まって、これまで以上の起伏が待っているかもしれない。以前、福井大学連合教職大学院の岸野麻衣先生が、本学連合教職大学院の取り組みを、「泳ぎながら船を組み立て、その船を常に組み立て直しながら大きくしていっているようだ」と形容しておられた。波（＝状況）を読み、そのなかで船（＝本プロジェクト）を組み立て直していく力、そしてその船を少しずつ大きくしていく力をつけつつ、今後も多言語多文化共生社会の構築に貢献できたらと思う。

付記：本稿は、次の2つの助成を受けた研究成果報告の一部である。
・平成30～32年度科学研究費補助金若手研究「多言語多文化共生に向けた協働型プロジェクト・ベースに基づく教員養成・研修の構築」（研究課題番号：18K12424　研究代表者：半原芳子）
・平成31年度福井大学地域貢献事業支援金「外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習」（事業責任者：半原芳子）

［参考文献］

加畑重樹(2018).『多文化共生社会の実現に向けた基盤の構築－学校・地域・専門機関との協働で取り組む「チームとしての学校」づくり－』, 学校改革実践研究報告 No.321, 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院).

半原芳子・柴岡小百合(2015).「福井の外国籍児童生徒の学びを支える－実践の展開を辿り今後の方向性を見出す－」, 『教師教育研究』8, 275-286.

半原芳子(2016).「持続可能な多言語多文化共生社会の構築に向けた協働探究のプロセス－福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づける－」, 『教師教育研究』9, 233-240.

半原芳子(2017).「福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づける－コーディネーターとしての力量形成のプロセス－」, 『教師教育研究』10, 231-239.

半原芳子(2018).「外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける」, 『教師教育研究』11, 225-236.

半原芳子・辻端聡子・桑原陽子(2019).「2018 年度日本語教育学会北陸支部活動企画をふり返る－専門職としての日本語教師の成長を支える実践記録－」, 『国際教育交流研究』3, 31-46.

柳沢昌一(2010).「アイデンティティの時間 / コミュニティの時間」, 『福井大学教職大学院Newsletter』27, 379.

柳沢昌一(2011)「実践と省察の組織化としての教育実践研究」, 『教育学研究』78(4), 423-438.

Schön, D.A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books.［柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か』鳳書房, 2007］.

Schön, D.A. (1987). *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass.［柳沢昌一・村田晶子監訳『省察的実践者の教育』鳳書房, 2017］.

Senge, P.M.(2006) . *The Fifth Discipline: The Art & Practice of The Learning Organization*. Crown Business.［枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳『学習する組織』英治出版, 2011］.

Wenger, E., et al. (2002). *Cultivating Communities of Practice*. Harvard Business School Press. ［野村恭彦監修『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社, 2002］.